

とを説明し、それについての高い評価を受け、また受けているといったことを、具体的に示す必要がある。それが日文研の未来を切り開く強力な方法なのである。

(国際日本文化研究センター所長)

地球化時代の研究所の現実と存在意義

金 昺 一

歴史的に見ると、自国の歴史と文化に対する研究と、国民的レベルでのその普及と伝播が、国家の最大の関心事となっていた時期がありました。しばしば言われるように、それは近代民族国家の出現を背景に民族アイデンティティ (national identity) を創出しようとする試みの一環と理解されてきました。一八世紀から一九世紀に及んだこのような流れは、二〇世紀に入り、立ち遅れた他の国家や地域に対する支配や統制を強化しようとするこれらの国の意図を背景に、また別の学問の登場をもたらしました。学問分野の中では、人類学が伝統的にこのような経緯で注目されて来ましたが、一九四五年以降、終戦と相まってアメリカで本格化した固有のアプローチの一つとして、地域研究 (Area Studies) を挙げることができます。

主に第三世界をはじめとする後進地域や国々といった他者に対する研究を指向した地域研究は、後に自国を対象とする米国研究 (American Studies) にも用いられ、これは主に大学や大

学研究所の英文学をはじめとする人文学において地位を確立しました。一方でこれはアメリカの歴史と文化に対する真正性 (authenticity) という側面とともに、また一方ではアメリカ的例外主義 (American Exceptionalism) の強化といったテーゼが入り交じった、多少不自然で自己矛盾的な異なる二つの様相を含んでいました。

後発資本主義国家や、いわゆる第二次世界大戦以後の新生独立国もまた、先進国が一世紀前、もしくはそれ以降に直面した民族国家のアイデンティティの創出と維持という国家的課題を避けて通ることはできませんでした。韓国ではその一環として、国主導による「民族意識の自覚と民族主体性の覚醒」を目標とする韓国精神文化研究院 (二〇〇五年韓国学中央研究院に改称) が一九七八年に設立されました。開院記念式でパク・チョンヒ (朴正熙) 大統領が行った演説では、「韓国学研究の中核」という言葉とともに「国学研究の総本山」という二つの表現が並んで発せられました。元をたどると、自国の立場から自国の歴史・文化を研究する「国学」(national studies) と、地域研究の一環として他者の視線を反映する「韓国学」(Korean Studies) という二語は、それ以降継続的な討論と論争の素地となりました。

問題は、このような論争が近代学問分野の出現以後、人文学と社会科学との間で繰り広げられた長きにわたる葛藤と重なり、事態をより一層複雑にしたという事実です。文・社・哲を主とする人文学は、自らを国学的伝統の守護者として名乗りを上げ、社会科学者らは比較可能性と普遍性といったレベルでこれに対抗しようとはしました。一九八〇年代以降のいわゆるカルチュラル・スタディーズや歴史的転換 (Historical Turn)、そしてポストモダンリズムの登場などは、その支持や共感の有無とは関係なく、このような対立と論争の古びたテーマを弱体化させ、無力化させています。

国の支援と介入と言う点から見ると、国主導による民族アイデンティティーの人為的創出と普及という往年の命題もまた、徐々に時代錯誤になりつつあります。代わりにそれは、より隠然かつ間接的な形に姿を変えてきています。国の領域が縮小したり迂回したりするのは、対照的に、一九八〇年代以降、いわゆる地球化時代と新自由主義の到来以降、市場領域の飛躍的拡大と包摂の第一の波は主に大学に向けられました。研究議題の設定と方向において、市場と競争論理の支配、商品化可能性の見込みが最優先の考慮事項になる時代の下、大学の理想は崩れていきます。地球的レベルで進んでいるこのような趨勢は、学問の領域において、研究者自らこのような規範と志向を内在化する自己技術 (self-technology) のイデオロギーを伝播させながら、現実に対する省察と批判としての研究への理想とビジョンを委縮させています。

これとは対照的に、国や公共が支援する研究所の体制が今日享受している相対的自由のための時間は、しかしながら残念なことに暫定的であり、長くは続かないでしょう。公共の支援がなければ実現しなかったであろう大規模かつ長期にわたる基礎研究としての「純粹」学問分野は、市場や国の独占的かつ排他的な利益と動機によって徐々に浸食されつつあります。このような状況において研究者は、市場の公然たる誘惑と国の隠然たる介入から自由な研究の自律空間を確保しなければならぬという厳しい状況に置かれています。ヘーゲルが言ったように、ミネルヴァの梟は迫り来る黄昏に飛び立ちますが、いつの時代でもいかなる場所においても、それは自らの意志と構想によるものだったという事実を切実に感じるこの頃です。

(韓国学中央研究院教授)